

富士山御中道 山行報告

【参加者】 CL 八角(記録) 菅井

【天候】 晴れ

【行程】 2018年9月16日

矢作 315→4:24 石川 PA4:35→6:02 富士 5 合目 6:30→7:50 奥庭分 8:00→8:50 滑沢 9:00
→10:00 奥庭分岐 10:10→11:00 富士 5 合目 11:10→11:40 佐藤小屋 12:20→12:45 駐車場 13:10
→13:20 大沢展望台 13:40→14:20 石割の湯 15:15→20:20 千葉

富士山の中腹、五合目あたりを一周すると約 25 キロだそうだ。この中腹を一周する古道を御中道(おちゅうどう)と呼び、昔は、富士山に 3 回登頂した者だけが通行を許される修験道であったようだ。今日、大沢崩れによって大きく寸断され一周はできないが、山梨県側の一部が整備されて通行が可能である。



昨年、吉田浅間神社から富士登山をした。一合目から五合目まで歩けば一部物好きのルートではなく、今も立派な富士にふさわしい格調の高い登山道だった。五合目からの富士登山とは全く趣が違っていた。ここを登山した人たちのことが自然と思ひ浮かんでくる。富士登山史の山道、御中道。ささやかだが、現在通れる御中道を歩いて体感したかった。



暑くて、そして後半は不安定な天気であった夏もあっという間に秋に。天気は不安定なまま引き続いて来た。そんな中、連休なか日は天候に恵まれた。

毎年、吉田口五合目に来ているが御中道に入るのは初めてである。広場のちょっと上に真新しい標識が立っている。整備された広い道を斜面に沿って進んでいくと、赤茶色の地肌をさらけ出した裾野、山頂が見え隠れする。背丈の低い針葉樹の落葉松が太陽の光を受け、透き通るような黄緑色をして初々しい。大きなカモシカがじっとこちらをみているのにはびっくりした。沢の側では黄色い大シカとも遭遇する。整備されている御中道にいつできた火口なのか、小さな火口、寄生火山が横切っている。間もなく大沢崩れの方向を示す標識があり、一般ハイカーへの注意ロープが張ってある。正直なところ、

ここから先に御中道の昔の面影を見ることができる。標高差はないが長く、当時すでに大沢崩れの難所はあったようで登頂とは違う険しさもあったのだろう。現在は大沢崩れだけでなく富士を取り巻く御中道は山肌の崩壊でズタズタと思われる。最初の沢の前までは比較的安全であるが、現在、大沢崩れ手前に2つの沢があり、浸食が激しく渡るのが困難となりつつある。沢と沢の間の樹林の中に道はなく、簡単な目印しかなく暗くなると抜け出すのが困難だ。もう大沢崩れを覗くという考えはもつべきではない。整備された御中道の先に、工事用の広い林道が御中道のすぐ下を平行に通っている。この林道は大沢崩れ手前の沢の崩壊防止工事現場まで続いているものと思われる。吉田口広場に戻ってくると、出発前、人がまばらであった場所は、超満員の観光客で賑やかになっていた。急いでそこを通り抜けて佐藤小屋に向かう。

佐藤小屋でラーメンをすすりながら富士山の案内雑誌を見ていると、富士山の登頂者のことが書いてあった。一番初めに登頂した人は諸説あり、修験道の開祖の何とか、また馬に乗って登頂した聖徳太子が最初とされているようだ。富士山は女人禁制の山だったことを初めて知った。それが解けたのは比較的新しく明治5年だそうだ。最初に登頂した女性は豪農の娘、高山たつ、と書いてあった。これもいかにも嘘っぽい名前なので隣の菅井さんに伝えると、ひとり、先に座っていた埼玉の女性が、この人を支援した人の著書の中に高山たつさんの名前が載っていると教えてくれた。東の間の行楽日和、渋滞に巻き込まれて帰って来た。山中湖湖畔の銭湯はよかった。石割の湯という名前だった。